中嶋ゼミの歴史と未来

外大史上、類例のないユニークで活発なゼミ

勝又美智雄
（日本経済新聞社）

中嶋ゼミは、外大の中でも、きわめてユニークなゼミであると断言できる。その最大の特徴は、OBを中心にして「ゼミの会」をつくり、毎年、春夏の合宿からセミナー、講演会、年刊の機関誌を発行するという活発な活動を長く続けてきたことにある。

大学の教官は、自分の専門分野の研究と、学生の指導・教育という両面で優れた成果を挙げることが理想とされているが、中嶋先生は研究者としては現代中国学の第一人者としての評価を挙げる一方、教育者としても第一級であることが「ゼミの会」の活動で十分、立証できる。そのゼミのユニークさを以下、七点挙げてみたい。

中嶋ゼミのセブン・ワンダーズ

● 長寿記録

まず第一に、その時間的な長さである。第一回卒業生は一九六七（昭和四二）年、最後のゼミ生の卒業が一九九七（平成九）年と、実に三一年間におよんでいる。

外大教師の中で、丸三〇年間も、ゼミを持っていた人ははたしてどれくらいいただろうか。国家公務員である国立大学教授には定年制があり、外大は六二歳だ。学者を志して二七、八歳で専任講師となって自分のゼミを持ったとして、最大限三五年、教師生活を送るとしても、

留学したり、他大学に移ったり、あるいは他大学から移籍してくる場合などを考えると、同じ大学で自分のゼミを三〇年以上も持つ教授は案外少ないのではないか。

もちろん、単に長ければ尊いというわけではないが、その「年輪の大きさ」には十分、意味があるだろう。

● 人数の多さ

第二に、そのゼミ生（OB）が総計二四四人という数に上っていることだ。これは九七年夏に作成された名簿に掲載されている人数だ。このゼミは在学生、大学院生がしっかり引き継ぎしながら「ゼミの会」を組織して、会則を作り、年会費をとって運営してきただけに、この数字は信頼できる。そこで思うに、外大のゼミで、ゼミ生が二〇〇人を越えるところが他にあるだろうか。大抵のゼミは卒論まで指導することが前提だから、例年、新たに加わるゼミ生はせいぜい数人だろう。定年まで勤めた教官でもゼミ生の数は大体百人から百数十人ではないだろうか。中嶋先生は香港での二年間の研究員生活やオーストラリア、フランス、アメリカなどの大学に客員教授として招かれたりしたこともあって、通算何年間かのブランクはあるが、ゼミは常に十人以上の学部生、院生でにぎわっていた。ここでは●Bの多さが特徴となる。

● ゼミ生の多様さ

第三に、ゼミ生の所属語科が実に多岐にわたっていることだ。

六七年の第一回卒業生から九七年の最後のゼミ生まで、二四四人の学科別の内訳を調べてみると、C＝八一、F＝二五、R＝一六、E＝一二、D＝一一、J＝一一、S＝九、Ic＝七、H＝四、U＝四、Im＝四、Rr＝四、A＝三、Po＝三、M＝二、K＝二、I＝二、V＝二、In＝一、院生＝三九、研究生＝一、聴講生＝一――となっている。

中国語科（C）が八一人で、ちょうど三三％、三人に一人という高い割合になっているというのは、ある意味で当然だろう。先生自身が中国語科出身で近代中国政治史、現代中国論を研究しており、その優れた業績に魅せられてゼミに入ることを希望する中国語科の学生が多いことを考えれば、容易に想像がつく。むしろここで注目すべきは、中国語科生以外が三分の二も占めているということだ。それも実に多様で、まさに外大の語科のすべてを網羅している観がある。つまり、あらゆる語科の学生が集まる語科横断的な性格の強いゼミであるということだ。

これだけの多彩さ、多様さは、語学・文学系のゼミではまず考えられない。他の地域研究ゼミでもないだろう。中嶋ゼミに集まる学生たちは、それぞれがアメリカ研究、フランス研究、ロシア研究という具合に自分の個別研究

領域を持ちながら、その地域研究の基礎となる問題意識の深め方、資料（史料）の読み方や分析手法、さらには世界史的な視野に立っての比較、意味づけ方などを学ぶことに意義を見出していたからだと言える。それこそがまさに「国際関係論ゼミ」と名乗るゆえんでもある。

④ 留学生が多い

そして第四に、中嶋ゼミには、驚くほど外国人留学生が多いことだ。その第一号は八一（昭和五六）年度のオーストラリア出身のレオン・ベンダー氏。大学院の日本語学科に学び、「大平内閣の環太平洋構想」を修論テーマにしていた。八二年度にはやはり院生で英国出身のマリア・ガブリエルさんが加わって、「ASEANへの日本の経済援助」を修論テーマにしていた。そして八六年度ころからはほぼ毎年、ゼミには必ず留学生がいるようになった。

③で挙げた学科別内訳の「院生」というのに一番多いのが、中国大陸、香港、台湾はもちろん、東南アジア、韓国からの留学生だ。欧米から日本研究に来て中嶋ゼミに入るというケースに始まって、欧米あるいは中国人の学生が中国研究をするために中嶋ゼミに来るケースが徐々に増えていった。中嶋先生の業績が国際的に高く評価され、留学生たちが母校の教官から中嶋先生を推薦されて来るケースが多いのだ。中嶋ゼミの国際競争力を誇ってもいいだろう。翻って考えてみればいいのだが、日本研究のために留学生が日本人教授の研究室に出入りすることは珍しくもなんともないが、外国研究のために日本の大学に留学するケースはかなり異例だろう。東京外大の数あるゼミの中でも、そんな国際色豊かなところが他にあるだろうか。例えば、英文学の権威とか、フランス語文法の専門家という教授のゼミに、その名声を慕って外国人留学生が卒論、修士論文を書くために来ているだろうか。私は寡聞にして、そんな〝嬉しい〟例を他に知らない。

つまり、ここでは学生の多種多様さが人種的にも国籍面でも広がっていて、日常的に国際交流、異文化接触が行われているわけで、文字通り国際化しているのが中嶋ゼミの大きな特徴になっている。

● 恒例の春夏合宿

中嶋ゼミの毎年の恒例行事に春合宿（三月に一泊二日で八王子セミナーハウスが多い）と夏合宿（長野県松本市内にある中嶋先生の実家兼別荘か、白馬や乗鞍の保養所で二泊三日）がある。外大でも毎年合宿をするゼミはそうめずらしくはないが、年に二回というのはあまりないはずだ。

春は四年生が仕上げたばかりの卒論を発表、夏は統一テーマを決めての研究報告が中心で、どちらも毎回、学部生、院生、留学生、OBが二〇人以上は集まった。この三〇年間、私は全合宿の三分の一くらいには参加したと思うが、いつも長時間、まじめな議論に付き合ったあと、夜中というより未明まで酒を飲みながら先輩、後輩が入り交じって、国際問題から個人的な仕事の話、人生観までだべり合うのを楽しんできた。若い学生たちにとっては、先輩のしたり顔をした人生訓など迷惑なものだろうが、OBにとっては、自分の青春時代、初心を思い返す貴重な機会であり、同時に熱心にあれこれ聞いてくる若い世代から刺激を受ける貴重な機会でもあった。

教育者の学生指導のタイプには、できるだけ学生の自由にさせる放牧型と、勉強の仕方から論文の書き方、脚注のつけ方、さらには私生活の相談まで細かく面倒をみる飼育型の二つがある。中嶋先生は飼育型の典型で、合宿は、そうした親身の相談にのる格好の場になっていた。

⑥ 海外へ研修旅行

八四年春には、実に二〇日間もの長期にわたって欧州研修旅行を敢行した。パリ、ウイーン、ロンドンなど五カ所で現地の大学、研究所で「ヨーロッパからアジアを考える」をテーマにセミナーを開催するツアーで、参加者は二六人。日程すべてを中嶋先生が企画し、学生たちは二、三●万円する旅行費をアルバイトして貯めて参加していた。

八七年春にも二一日間、総勢三二人で台北、香港、クアラルンプール、パリ、ウイーン、ザルツブルグ、ミュンヘン、ハイデルベルグ、フランクフルト、ロンドンと回り、計八回の研修セミナーを実施。さらに八九年夏には第三回海外研修旅行として、三二人参加して二一日間、クアラルンプール、ロンドン、パリ、フィレンツエ、ベニス、ザルツブルグ、ベルリンと回って五回のセミナーを開催している。

旅行中はすべて先生自身がツアー・コンダクター兼セミナーの司会役を務め、行く先々で先生が日頃親しくしている現地人の研究仲間がホスト役を務めて、セミナーはすべて英語で討論する形式だった。OBたちが恩師を囲む観光旅行なら、そんなに珍しくもないだろうが、現地の大学、研究所と提携して研修セミナーをやるというゼミが、はたして外大に限らず、他の大学でもあるだろうか。私学で学生の短期語学留学を実施しているところはいくつかあるが、それは大学が制度的に学校行事の一環として実施しているもので、一教官のゼミとしては私は聞いたことがない。

特に八九年のツアーでは、ベルリンの壁の崩壊直前、その壁を東側、西側の両方から見る機会を設けて、学生たちに歴史的大激動を実感させることができた。

私はこの海外研修には一度も参加したことはないが、参加した学生たちから後で話を聞き、よくぞゼミがここ

まで発信型の活動ができたものだと、ひたすら感心していた。

⑦ ゼミ誌『歴史と未来』の発行

そして最後に、しかし最も意義深い重要なこととして、このゼミが三〇年間に実に二五冊に及ぶゼミ誌『歴史と未来』(年会報)を発行してきたことが挙げられる。ゼミ誌というと、普通は同窓会報と同じでOBの思い出話が中心だろうが、これは全く違う。国際関係論の専門誌という性格を持たせて、ゼミ生の卒業論文を中心に、学部生の研究報告、OBの論文、エッセイを収録している。ネーミングは先生自身の発案で、「国際関係論を勉強する者は歴史を深く学びながら、未来を切り開くための指針を考えていこう」という意味を込めていた。ゼミ生の研究成果を世に問う発信型の雑誌であり、それは私の知る限り、国公私立を含めて、日本中の大学のゼミの中で希有なことであり、貴重な有形文化財と言える(ちなみに本誌は全号、国立国会図書館に寄贈され、保管されている)。

ただ、実際の卒論はたいてい原稿用紙四〇〇字詰めで一〇〇—二〇〇枚あり、それをこの雑誌用に筆者がそれぞれ三〇枚以内に要約して紹介するのをルールにしている。それは、一つのテーマで論文を書くのに三●枚もあればほぼ十分、あとはその主張をいかに説得的に提示するかで、具体的な例証を豊富に、しかも信頼できる先人の業績からの的確な引用を加えることでいくらでも長くできる、一〇〇枚から二〇〇枚の立派な論文が書けるはずだし、逆に三〇枚に要約できない論文などない、という「中嶋理論」の実践の場でもあった。

ちなみに創刊号(六八年七月刊)は第一期生の卒論ダイジェストが三本(中国科・堀憲昭氏の「国連と中国」、ロシア科・長谷川哲也氏の「民族理論とソ連の民族政策」、インドゥー科・石井直木氏の「帝国主義下のインド木綿工業」)に三、四年生の研究論文が五本、それに二年生のレポートが二本(その一つは「力の均衡」による平和の問題を論じた拙文)の計一〇本が掲載された。それも「ゼミ生の優れた研究成果を教師一人が読むだけではもったいない、広く学内外に公表して議論を巻き起こそう、知的交流を活発にして切磋琢磨し合おう」という先生の提案をゼミ生で実現しようと試みたものだった。

当時は「全共闘」による大学紛争が全国に広がった時で、学内にはガリ版刷りのビラやパンフが氾濫していたが、それらの「政治的」な文書と一線を画する意味で、B5判のタイプ印刷で八二ページの雑誌を五〇〇部刷った。

問題は収支だが、創刊号の編集委員だった私の当時のメモでは、印刷経費が一二万五千円、うち四万円を執筆者たちが負担し(原稿料をもらうのではなく、逆に掲載料を払うという形で、この「同人誌方式」がその後もずっと続く)、販売収入が四万円弱(ゼミ生が一部二〇〇円で販売し、生協書籍部にも置いてもらった結果、二〇〇部近く売れた)、残りは先生と長谷川哲也編集長以下第一期生がかぶることになってしまった(当時、大卒の初任給が四万円程度だった)。

この赤字出版は創刊以来ずっとゼミの最大の頭痛のタネであったが、その財政難を乗り越えて、第二号(七四年八月刊)から第二五号(九九年四月刊)に至るまで、普通の月刊雑誌と同じA五判二段組みの活版印刷で、体裁も内容的にも格段に優れたものに成長し、発展していった。各号ともほぼ百数十ページ、二〇号に至っては二一〇ページにも及んだ。出版経費は毎回、七、八〇万円かかったが、その六割を執筆料、販売収入、広告収入(先生の親しい出版社が書籍広告を出してくれた)でまかない、不足分は「ゼミの会」が補填し、さらに不足分は先生がポケットマネーを出すという形が多かった。

つまりゼミ誌は、中嶋先生の情熱と、学部生、院生の意欲と、そして「ゼミの会」の会費によって支えられてきたと言えるだろう。

そして私自身、この雑誌に一二回寄稿しており、最多出場組の一人となっている。新聞記者時代は新聞に書けなかったことを、現場記者でなくなってからは日頃感じていることをエッセイの形で、楽しく書き、それが自分の生活史を彩る指標にもなってきた。

以上を見てくると、中嶋ゼミの活動は、文字通りの「セブン・ワンダーズ」(七不思議ではなく、七つの驚異)と言えるのではないか。それやこれやで、たしか九〇年ごろには総合雑誌(『文芸春秋』だったと記憶している)のカラーグラビアで、外大の名物ゼミとして大きく取り上げられたこともあった。

では次に、そこで学んだゼミ生の特徴が何かを見てみよう。

世代は移りゆく——ゼミ生群像

ゼミの第一期生の年長組は一九四二(昭和一七)年生まれ。中嶋先生よりわずか五歳年下で、六〇年安保の余燼を深く吸った世代だ。先生とも先輩、後輩という感覚で親しく接することができる世代で、常に「ゼミの会」の指南役を担ってくれた。そもそも会費方式の「ゼミの会」の設立を提唱したのも堀氏であり、堀、長谷川両氏ら一期生らの優れた指導力で、持続できる組織体制が整ったのだった。その彼らも今は六〇歳定年を迎え、第二の人生づくりに入っている。

それに続くのが「全共闘世代」で、まさに全共闘運動が真っ盛りの七〇年前後に在籍していた戦後生まれの

「団塊の世代」である。私もその一人で、政治意識は高いが、学園紛争でろくに勉強もせず、口だけは達者で生意気な世代で、今、五〇代半ばになって、IT（情報技術）革命の中で取り残される不安にひそかに怯えている「困ったお荷物・中年」世代となっている（そう、すべて自分のことです）。

第三の世代は、学園が戦い済んで日が暮れた後に入学した「戦無派」世代で、現在、社会の第一線で活躍している四〇代―五〇代前半世代だ。ITも自在に使いこなし、最も生産性の高い仕事をしている。最もしたたかで、たくましい世代と言える。

それに続くのが、八〇年代に大学生活を送り、バブル経済で社会人になった現在三〇代の人たち。先行世代から「政治意識が低い典型的ノンポリ」と評されても「どこが悪い」と動ずる気配もなく、自分の好きなことに熱中している「オタク」世代でもある。

そして最後に、バブルがはじけた後の低迷期である九〇年代（「失われた十年」）に学生だった二〇代―三〇代前半の人たち。充たされた幼少年時代を過ごして、チャレンジ精神に乏しく、社会を改革する意欲も薄い。スキャンダルの続出で政治家にも官僚にも学者にも幻滅していて、官公庁も銀行も大企業も信頼しない。一見素直で聞き分けがいいが、それは自己主張がなく、他人との摩擦を避けたいだけ。とりあえず、ちゃっかり親に寄生して、ケータイとパソコンで友だち探し、自分探しをしているパラサイト・シングルの「世紀末」世代ではある。

――もちろん、これはすべて私の個人的な印象批評である。だがここで強調したいのは、そんな多様な世代が集い、言いたいことを言い合う交流の場（サロン）として、ゼミの会があるということだ。毎年一月二日は、先生のお宅で新年会があるが、現役学生から長老まで、いつも数十人が集まって夜遅くまで懇談している。この一〇年ほど、留学生の参加がだんだん増え、二〇〇一年は五〇数人参加して、その三分の一が留学生だった。留学生にとっては、日本のお正月の過ごし方を体験する貴重な場になっていて、中国人留学生がつくる特製餃子が新年会の名物としてすっかり定着している。

そこでゼミ生の進路を見ると、大別して①学者・研究者②民間企業（銀行、証券、メーカー）③マスコミの世界―がほぼ三割ずつで、残り一割は公務員という感じになっている。

もちろん、転職者も少なくないし、職種でいえば民間企業、マスコミから学者に転身した例が目立っている。女性の場合、結婚や出産、夫の転勤などでいったん仕事を辞めても、子育てが一段落すると、大学院に行ったり、教職に就いたり、在宅勤務や地域のNPO、NGOでボラティア活動したり、と意欲的に行動している人が多い（例えば石山庸子さん、花沢聖子さん、鈴木あや子さん、

吉沢美紀さん）。そこには「中嶋ゼミの卒業生としての誇りを持ち、人との出会いを大切に、己の持てるものを人と分かち合って心豊かに生きていこうと思う」（四宮瑞枝さん『歴史と未来』二〇号）という志がしっかりと共有されていると私は感じている。

中嶋嶺雄論の試み

最後に、恩師である中嶋先生について記したい。ゼミ誌六号で「中嶋嶺雄の歴史と未来」と題して書いたり、合宿の折に学生たちに語ってきたことの延長となる私論であり、試論である。

六〇年安保世代である先生は、全学連運動の闘士から学者の道に入ったが、その後の半生を私は一言で「ラディカル（根源的）に理想を追求して、冷静に行動するリアリスト（現実主義者）」と評している。

その理想は、研究者としても、教師としても、第一級の優れた存在となり、社会に貢献し続けようということにあり、それを実現するための強固な意志と情熱を常に持ち続けていることに、先生の真骨頂がある。

まず研究者としては、研究対象（現代中国）の真相をつかむことに、学者の良心を賭けてきた。一九六〇年代、中国研究者の多くが毛沢東中国に心酔し、礼賛する中で、先生は冷静に資料を分析し、中国の政治が決してきれいごとでなく、舞台裏ですさまじい権力闘争が行われていることを巧みにあぶり出していく。二八歳の処女作『現代中国論』以来、政治学、社会学、心理学、言語学など各分野の最新成果を積極的に取り入れた計量分析、定性分析によって、自分の大胆な仮説を重層的に実証していく。そこにあるのは、学界の権威なり、主流派的な見解に決して迎合せず、学問研究にあたっては情緒的な主観的判断を排除して、客観的に説得力のある説明をしようという姿勢である。学者としてはまさに反権力、反権威の気骨に溢れ、エスタブリッシュメントに対するラディカル（根源的）な批判精神に満ちた闘士であった。

その情熱は、旺盛な執筆力によって、次々に著作となって結実していく。実生活でも四人の子供に恵まれたが、学者としてもたいへんな多産家で、私の書庫の中嶋嶺雄コーナーにある著書を数えてみたら、二〇〇二年夏現在、三八冊あった。実にほぼ一年に一冊のペースであり、学者としてはまずズバ抜けた生産性の高さではある。しかもこれ以外に先生が編纂した論文集など、私が見落としているものがまだ多数あるし、さらに英文で寄稿して欧米で出版された社会科学事典、百科事典、研究論文集なども含まれていない。

現在でも、中国で何かある度に、日本のマスコミが競うように先生に分析やコメントを求めているが、それはこの三五年間、先生の中国分析の的確さ、読みの深さに

大きな信頼を置いていることの表れに他ならない。学者として優れた業績を生み出す一方、時間に追われるマスコミの要請に応えられるだけの機動性、瞬発力を持っているという、まさに「ジャーナリスティック・アカデミスト」のモデルケースとも言えるだろう。

さらに先生には、芸術活動に対するきわめて強い情熱がある。寸暇を見つけてはスケッチをし、バイオリンを演奏する。スケッチはゼミ誌『歴史と未来』の毎号の表紙を飾り、バイオリンは幼いときから鈴木メソッドで学び、若い時にはアルバイトで演奏したり、指揮棒を振っていた。新キャンパス移転記念式典でも学生たちに混じって楽しそうに祝典曲を合奏していた。まさに多芸、多才、スーパーマン的な活躍ぶりではある。

次に教師としての資質を考えると、先生ほど学生の指導に熱心で、しかも大学改革の意欲に満ちて行動している教師も少ないのではないか。

外大を地域研究の最高水準を誇れる大学にしたい、世界中から優れた学者、学生が集まって自由に交流し、切磋琢磨していくような国際的に開かれた大学にしたい――これが先生の四十年来の夢であり、目標であったし、それは今も変わらない。

全共闘による大学紛争のころ、「造反有理」「破壊の上に建設を」をスローガンに掲げ、ただ破壊するだけだった全共闘の「心情倫理」に迎合する教師が多かった中で、先生は「責任倫理」によって全共闘を批判し、大学改革が決して激情や破壊から生まれるものではないことを力説し続けていた。そして全共闘が去り、全共闘シンパの教官たちが再び自分たちの殻に閉じ籠もり、既得権益を守ることだけに熱心になっていった時、先生は志を同じくする人たちとともに本格的な大学改革を進めていく。その具体的な成果が、七七年春、大学院地域研究科の開設に結びついて来る。

「学問の自由」の名のもとに自分の講座枠の確保だけに汲々とする教師を「無責任な専門バカ」と非難したのが全共闘であり、全共闘シンパの教師こそまさに「開かれた大学づくり」に熱心でなければならないはずだった。だが事実は逆であり、全共闘シンパ教師の多くは責任を放棄して「専門バカ」に逆戻りし、あらゆる改革に異論を唱えるだけに終始する。一方、全共闘と真っ向から対決した教師たちは「責任倫理」をバネに大学改革の推進者となる――ここにも歴史の皮肉な逆説があった。

私が先生を「リアリスト」と表現する時、それは「リアルな認識に支えられた理想主義者」と言い換えた方がいいかも知れない。周囲を見ても、世間に最も多いリアリスト（現実主義者）は「もっと現実を直視せよ」と言うだけで、既成事実に引きずられて状況追従、大勢順応することを是とし、改革意欲もなく既得権を守ることで安心している人たちだからだ。その点、先生ほどいつまでも改革意欲を持続させる人はめずらしい。

教授時代から留学生の受け入れに熱心だったのは既に見た通りだが、学長職についてからは、さらに精力的に大学の国際化を推進していく。世界二八カ国四四大学と交流協定を結び、一年間に二〇人以上の留学生を受け入れるISEPプログラムを創設したり、UMAP（アジア太平洋地域大学連合）の設立に尽力するなど「世界に開かれた大学づくり」の成果を着々と挙げつつある。

「今や外大は、全国の大学の中で、留学生の比率が最も高い大学になっている」というのが先生の自慢だが、ここで留意したいのは、その自慢が、単に外大だけが良くなればいい、という偏狭な外大至上主義から来るのでは全くなく、むしろ日本の大学全体の研究・教育レベルを上げるために、外大が先頭に立ってモデルケースになろうという強い意志の表れだということだ。その背景には、今のままでは日本の高等教育は、世界から相手にされなくなり、軽蔑され、無視されかねない、という強い危機感がある。

日本の大学のあり方については、私たちOBが社会人の目から見ても、そのタコツボ型の研究体制、閉鎖的で独善的な教育システム、外国人研究者・留学生を柔軟に受け入れることを拒否する管理システム、教員の業績評価や資格審査のないルーズな人事管理、曖昧で不透明な学位授与システム――などおかしいところがいっぱいあると感じている。とりわけ国公立大学の場合、教育公務員特例法によって、いったん正教員になればよほどの不祥事（たとえばセクハラや刑事犯罪に絡むなどのスキャンダル）を起こさない限り、定年までまず失職する心配がないほど、身分的にしっかりと守られている。「大学の自治・学問の自由」の名の下に、どんな奇行があっても、いいかげんな授業をしていても、教育面でも研究面でもほとんど業績がなくても辞めさせられることがない。そうした既得権益を享受している教員ほど、権益を減らす動きには敏感に反対し、要はあらゆる改革に抵抗するのが常だ。

それに対して先生は「少しずつ、粘り強く、改革していくしかないよ」と苦笑しながらも、大学の国際競争力調査で日本の大学がきわめて低い評価しか得ていない事実には「欧米はおろか、アジアでも日本の大学に幻滅した、失望した、という声が出始めている」と深刻に受け止めている。

大学改革の努力は「国際化」だけではない。多摩へのキャンパス移転を機に、近隣の大学との単位互換制度を導入する大学連合構想を積極的に進めてきたし、これまでも外大の学問研究成果を世に問う出版事業や公開講座などを充実させるのはもちろん、さらに国立大学協会副会長や政府の各種諮問機関の有力メンバーとして、留学生政策の整備や大学院改革、民間と大学との人事交流や

社会人を教員に採用する方策を検討するなど「社会に開かれた大学づくり」にも積極的に取り組んできた。

ここには一流の学者が、経営者としても優れた手腕を持っているという希有な例がある。名選手必ずしも名監督ならず、というのはプロの世界を見ればすぐわかるが、大学でも学者、研究者として優れた人が、教育者としても優れ、さらに経営者としても優れているというのは、あまり例がないだろう。

だがそれが大学内では、守旧派、保守派から「やり過ぎ」「目立ち過ぎ」との反発を招いてきたのも事実だ。二〇〇一年夏の学長選挙で、一期四年、二期目から二年で改選を迎え、三選を目指したところ、外国語学部長らが「反中嶋」陣営をつくり、アジア・アフリカ文化研究所で定年直前だった女性教授を担ぎ出し、猛烈な「反中嶋」キャンペーンを展開した。その主な理由は「学長は何事も教授会の議を経て（つまり満場一致、あるいは多数決で）学内運営をすべきなのに、中嶋学長は独断専行が多く、教授会を軽視している」「国内はもちろん海外にも頻繁に講演や自分の研究のために出かけていて学長室を留守にすることが多く、学長としての職務を十分に果たしていない」「学長は二期で十分。三期八年は長すぎる」と言うもので、一本釣りと電話攻勢で女子教員をまとめて多数派工作に成功し、僅差で中嶋三選を阻止した。

私自身はたまたまこの数年、外大の非常勤講師として毎週一回、留学生たちに日本の政治・経済・社会事情を英語で講義してきたので、外大の学内事情についても割合身近に接してきたし、ごく自然に耳に入ってきていた。それで側聞するのは、二〇〇一年九月に就任した新学長はいたってまじめで誠実な性格の人で、早朝から遅くまで学長室にこもって勤務していることだ。それまでAA研究所にいて学内運営や教務、学生指導などとはほとんど縁がなかったため、覚えることが大量にあって「勉強」に終われているようだが、中嶋学長時代に敷かれた改革路線をそのまま継承することには支持者たちの抵抗が強いため、立ち往生しているのが実情のようだ。同時に、「反中嶋」陣営の中心人物たちも、いざ自分たちが政権を握っても改革せざるを得ない事項が大量にあり、それを進めるのに「味方＝守旧派の抵抗勢力」を説得することがいかに困難であるかに直面して「これほど大学経営が大変だとは思わなかった」とぼやいているという。

一方、文部科学省はこれまでと変わらず、中嶋先生に大きな信頼を置いており、最重要の諮問機関である中央教育審議会での大学院改革や留学生政策などについては引き続き、先生に部会長や主査という取りまとめ役を依頼している。

さらに秋田、長崎の新しい国際大学構想で先生がまとめ役に担ぎ出され、どちらでも「世界に通用する優れた大学づくり」を目指して、惜しみなく時間と労力を割いている。秋田については寺田知事に懇請され、新大学設立準備委員長を引き受けているが、それに注ぐエネルギーは大変なものであり、私自身、準備委員の一人として加わって側で見ていてもひたすら感心するばかりだ。

こうして見てくると、先生が取り組んでいる「優れた大学づくり」「国際的に通用する優れた人材づくり」という改革は、まだまだ途上であり、それは終わりのないマラソンのようなものだ。時には「性急すぎる」「独断専行」と批判を浴び、その活躍ぶりに嫉妬まじりの中傷も少なくない。長い間、それを身近に見てきた一人として、先生は実にこの三〇年以上にわたって、主張にブレがなく、言行が一貫していると思う。

その基本姿勢は、まさに『歴史と未来』の創刊の辞で、生硬に呼びかけている通りだ。「この（『歴史と未来』という）タイトルはどう考えても荷が重い。むしろ遠からぬ将来での挫折を予見させるようなものである。だが、諸君、その時は共に倒れようではないか。挫折と傷心とは、知的生産者にとって自己の存在証明なのであり、これに反し、官僚もしくは官許知識人というものは、決して傷つかないものなのだ」。

傷つくことを恐れず、常に改革に挑戦する姿勢――。毀誉褒貶はあっても、この人は信用できる、信頼できる、と心から思えるのは、そういう姿勢を堅持している人だろう。ゼミ生の多くは、そうした恩師を持ち得たことを感謝しながら、「持続する志」の共有者として先生の活動を支援していきたいと考えているのではないだろうか。そして、まさにそこにこそ、中嶋ゼミの「未来」がかかっており、「志の共同体」として今後もさらに発展し続けていけるのではないか、と私は思っている。

（注）本稿は東京外大同窓会の求めに応じて、二〇〇一年に中嶋ゼミのPRとして書いたものを原型にしている。その同窓会報が未刊行のため、加筆して本号に転載した。ゼミ生以外の人にも中嶋ゼミの特徴を解説することに力点を置いたものとなっている。

ゼミ生の皆さんには、私たちのゼミの歴史的位置づけ、客観的評価の試みとして読んでいただきたい。

（かつまた・みちお　一九七二年英米語学科卒業）

★中嶋先生最終講義
中嶋嶺雄さんの退任記念パーティ開催

二〇〇一年一〇月三一日、東京外国語大学マルチメディアホールにて、中嶋先生が、「国際社会の変動と大学―あえて学問の有効性を問う」と題して最終講義をなされました。

三〇余年に及ぶ東外大での研究教育活動の集大成としての最終講義には、三〇〇名収容のマルチメディアホールを埋め尽くすほどの人が集まり、大変な熱気に包まれました。

中嶋先生の最終講義は、単なる研究史の回顧にとどまらず、あくまで問題提起的であり、「挑戦する学者」の面目を躍如するものとなりましたが、今号の巻頭に、『諸君！』二〇〇二年一月号に掲載された講義録を転載いたしましたので、ぜひご覧下さい。

また、同日夜には、帝国ホテル「富士の間」にて、「中嶋嶺雄さんの退任記念パーティ」がゼミの会の主催で開催され、学術界、政界、経済界、マスコミから、五〇〇名に近い参加者が集まり、長年の労をねぎらいました。

★二〇〇二年度合宿セミナー開催

二〇〇二年八月二八日、二九日の両日、八王子大学セミナーハウスにて、「二〇〇二年度合宿セミナー」が開催されました。

セミナーでは、「日中国交三〇周年の意味」、「グローバリゼーションとメディア」の二つのセッションで充実した討論が繰り広げられました。

また、ゼミの会の総会も開催され、新役員の選出、会計報告、会則変更などの決定がなされました。

★中嶋ゼミ新年会開催

二〇〇三年一月二日、中嶋先生の御宅で恒例の新年会が開催されました。ゼミのOB・OGや各国からの留学生など、四〇名前後の参加者があり、楽しいひとときとなりました。

★松本充豊会員学術賞受賞

「ゼミの会」のページという場をおかりして、会員の皆様に慶祝すべき朗報をお知らせいたします。

この度、松本充豊会員（一九九六年大学院博士前期課程修了）が、神戸大学に提出した博士論文をまとめた労作「中国国民党「党営事業」の研究」で、財団法人村尾育英会学術賞の学術奨励賞を受賞されました。松本会員の受賞を心よりお慶び申し上げます。

★『北京烈烈』講談社学術文庫に

サントリー学芸賞も受賞した中嶋先生の代表作『北京烈烈（上下）』が、講談社学術文庫の一冊として、文庫化されました。定価は、税別で一四〇〇円となっております。

また、ゼミの会OBが加わった研究プロジェクト「日中国交を繞る内政と外交」が改稿されて収めされている『日中友好」という幻想』が、PHP新書より（七四〇円・税別）より、それぞれ好評発売中です。

★中嶋先生、国際教養大学学長予定者に

最終講義でも、日本の高等教育の在り方に疑問を投げかけ、大学改革の必要性を説かれていた中嶋先生が、この度、秋田県に新設される国際教養大学（Akita International University）の学長予定者として、同大学の創設準備に携わられることとなりました。

二〇〇四年四月開学予定の同大学の創設準備委員会には、明石康氏（元国連事務次長）、生駒俊明氏（東京大学名誉教授）、給田英哉氏（国際交流基金日米センター所長）、グレゴリー・クラーク氏（前多摩大学長）、船橋洋一氏（朝日新聞社編集局特別編集委員）らが名を連ね、ゼミの会からは、勝又美智雄会員（一九七二年英米語科卒）が同委員会の専門部会委員として参与されています。

同大学では、「英語をはじめとする外国語の卓越した運用能力と、豊かな教養、グローバルな知識を身に付けた、実践力のある人材を養成し、地域社会と国際社会に貢献すること」を目標に、少人数制（入学定員一〇〇名）を基本とする教育重視の環境整備、秋学期入学制、すべての授業を英語で行なう特色あるカリキュラム、原則一年以上の海外留学の義務化など、斬新な大学教育が実践されます。

また、「地方独立行政法人制度」が明確になった時点で、他に先駆けて公共大学の最初の非公務員型の独立行政法人の大学に移行し、柔軟かつ機動的な大学運営を実現する予定であるほか、全教員に対する任期制（原則三年間）の適用、客観的な教育研究評価制度の確立、能力給制度の採用など、民間の経営感覚を取り入れた効率的な大学経営を行なうことで、制度面、運営面でも、他に類を見ない特色ある大学作りを目指すとのことです。

現在、中嶋先生を中心とした創設準備委員会によって、開学準備が進められておりますが、『日本経済新聞』、*The Japan Times*, *The Chronicle of Higher Education* などに掲載された教員・職員の公募には、世界各地から多数の応募が寄せられ、一五名の募集人員に対して、延べ五六七名の応募があったことが、地元各紙で報じられました。

これに限らず、国際教養大学の「実験」は、今後様々な形で報道されることと思います。中嶋先生の新天地でのご活躍に、ご注目ください。

中嶋ゼミの会二〇〇三年度役員紹介

代表幹事	名越　健郎（時事通信社）
幹事	堀　憲昭（㈱講談社）
	勝又美智雄（日経新聞）
	伴　美喜子（大学セミナー・ハウス）
	伊藤　努（時事通信社）
	松本　達也（RBCドミニオン証券）
	孫　国鳳（大学セミナー・ハウス）
	茶園　昌宏（NHK）
顧問	野崎　晃市（筑波大学大学院）
	山崎　直也（杏林大学非常勤）
	井尻　秀憲（東京外国語大学）
	渡邊　啓貴（東京外国語大学）
会計	山崎　直也（幹事兼任）

編集後記

★今号はこれまで三五年間にわたって発行してきた『歴史と未来』とは性格が異なっている。従来は国際関係の論文を中心にした学術誌という色彩が濃かったが、今回は中嶋先生の退官を記念して、ゼミのサロン誌的な性格を前面に打ち出した。その編集方針を決めたのが二〇〇一年夏のこと。〇二年春ごろの発刊を目指したが、結局、ずるずると延びて年を越してしまった。それも私の多忙にかまけてのせいであり、早くから原稿を出してくれていた執筆者の皆さんにまず、この場を借りておわびしたい。

それが無事刊行にこぎ着けたのも山崎君の尽力によるものであり、無為無策の編集長だった私としては、彼に感謝するのみだ。

顧みれば、六八年春の創刊号の編集委員だった私も社会人となって三〇年が過ぎた。ゼミの第一回卒業生たちも六〇歳定年を迎えつつある。ゼミの中核をなしてきた人たちは今、三〇代から五〇代前半の働き盛りで、それぞれの分野、領域で活躍している。今号では、そうしたOBたちの寄稿から、それぞれの青春時代、壮年時代、熟年時代を振り返りながら、たっぷり感慨にふける楽しみを味わってもらえると思う。

それはゼミに集い、『歴史と未来』にかかわってきた者たちが、ここまで歩んできた「歴史」の意味をあらためて考えることでもあるだろう。

ひとつの時代が終われば、新しい時代がやってくる。いや、ひとつの時代を終えて、次にどんな時代をつくっていくか。『歴史と未来』について言えば、これで終刊号にするか、それともいずれ新しい理念、理想をつぎ込みながら、さらに発展させていくか――。私自身は今後、毎年の刊行は事実上、無理にしても、隔年くらいのペースでさらに続けていくのがいいのではないかと思っているが、それはいずれ、今号の筆者、読者の皆さんで考えていただきたい。

（勝又）

★ 前号（第二五号）の刊行から四年、中嶋先生の最終講義と学長退任記念パーティから約一年半、皆様お待ちかねの『歴史と未来』最新号（中嶋嶺雄先生退任記念号）をようやく刊行することができ、ホッとしております。

台湾留学中の二〇〇二年一月に、今号編集長の勝又美智雄さんから原稿依頼をいただいた時には、「されど、編集は我が事にあらず」となかば対岸の火事のように思っていたのですが、同年三月に日本に戻るや、様々な紆余曲折があって、結局、自らの原稿が掲載される『歴史と未来』を、自らの手で編集する、ということになりました。

これまでゼミの会では、セミナーの企画・運営や会計といった仕事に従事することが多かった私ですが、「請け負った以上は、全力を尽くして、できるだけ良いものを」という気持ちで編集作業に臨みました。

不慣れなこともあって、至らない点も多々あることと思いますが、諸先輩の魅力あふれる力作が、編集の不備を補ってくれているもの、と確信しております。

最後に、今回の編集作業にご協力・ご助言をいただいたすべての皆様と広告をいただいたPHP研究所及びビジネス社に、厚く御礼を申し上げます。

（山崎直也）

『歴史と未来』第26号　特別頒布価格￥800

発行日　2003年3月14日
編集発行人　勝又　美智雄
発行所　中嶋ゼミの会
東京都板橋区常盤台1-28-3
中嶋嶺雄方　TEL:03-3965-3007
印刷所　明宏印刷株式会社
東京都豊島区北大塚3-21-10
TEL:03-5394-1861

◎禁無断転載 ● 2003